

上海博楚簡『鄭子家喪』譯注

— 附・史料的人格に關する小考 —

小 寺 敦

前言

本稿の掲載誌は中國古代の専門家のみを対象とするものではないため、まず上海博楚簡についてごく簡単に説明しておく。⁽¹⁾これは、一九九四年春から冬にかけて香港の骨董市場に現れ、上海博物館の馬承源らが購入した、戰國時代の楚文字（現在の湖北・湖南省を中心とする地域で使用された漢字）で書かれた竹簡群である。購入した機關名を冠して「上海博楚簡」・「上博（楚）簡」と稱する。上海博楚簡の竹と文字の墨については、炭素一四年代で二二五七±六五年前、すなわち前三〇七±六五前という數字が出ている。前三〇七年は戰國中期の終わり頃であり、誤差を考えれば戰國中期から後期となる。上海博楚簡に年代が近いとされる郭店楚簡については、郭店楚墓の土器編年や竹簡に書かれた文字の特徴から、戰國中期の終わり頃と推定する説が有力である。郭店楚簡は正式に發掘されたため、贋作とする研究者はまずいないだろうが、上海博楚簡は骨董市場で發見されたという経緯により、當初から常に偽作の疑いがつきまわってきた。現段階では本物とする見解が次第に有力なものとなりつつあるが、眞偽について慎重な態度をとる研究者がいまだに少なくない。今日、こういった骨董市場から買い戻された出土文獻はますます増大しつ

上海博楚簡『鄭子家喪』譯注

つあり、中國古代研究者はそれら史料に對していかなるスタンスをとるか決斷することを迫られており、筆者もその問題に關する態度を表明したことがある。⁽²⁾

本稿で扱う『鄭子家喪』は、馬承源主編の圖版本第七冊に收められている一篇である。⁽³⁾ 標題の『鄭子家喪』は本篇冒頭の四文字によつてゐる。『鄭子家喪』には、ほぼ同文だが竹簡の長さや字體が異なる甲・乙二種類の版本がある。上海博楚簡の多くの篇では、圖版本釋文の編聯（竹簡の配列）が信頼できないのだが、幸いにして『鄭子家喪』においては甲・乙篇がほぼ同文であり、かつそれぞれの竹簡の長さ・竹簡一本あたりの字數が異なるため、編聯の問題は皆無といつてよい。その内容を簡単に説明すると、鄭の子家の死後、その葬儀をめぐり、春秋五霸の一人にも擧げられる有名な楚の莊王が鄭國を攻撃し、それに對して晉國が救援のために出兵したが、楚國も出兵してこれを撃破したというものである。關係ありそうな記事が『左傳』・『史記』にみられ、また鬼神への言及があるところから、『墨子』との關係が早くも圖版本で議論されている。そして『鄭子家喪』には傳世文獻にはみられない記事が含まれ、思想的な價值にとどまらず、春秋戰國時代の史料としても非常に貴重なものである。

『鄭子家喪』に關する論考は二〇〇八年末の圖版本出版直後から、インターネット上の簡牘研究關連サイトを中心として矢継ぎ早に發表された。⁽⁴⁾ 本稿執筆時點では專論が約三〇本に達しているけれども、研究發表の波はひとまず落ち着いた観がある。ちょうど今が『鄭子家喪』に關する研究を振り返つて整理するによい時期であろう。そこで本稿では、先行研究の助けを借りつつ『鄭子家喪』の釋文を作成すると共に、その史料的人格に關する基礎的な檢討を行つていきたい。

注

(1) 馬承源「前言・戰國楚竹書的發現保護和整理」(馬承源主編『上海博物館藏戰國楚竹書』(一)、上海古籍出版社、上海、二〇〇一年十一月)。以下、馬承源主編のこのシリーズを圖版本と稱する。

(2) 拙稿「湖南大學嶽麓書院秦簡を拜見して」(『出土文獻と秦楚文化』四、東京、二〇〇九年三月)。ここでは、研究機關が骨董市場でこの種の出土史料を買い戻すのは、本物が散逸した場合の不利益を考慮すればやむを得ないことであり、そうした史料についての黨派的な眞偽論争は避け、眞偽問題を念頭に置きつつ慎重かつ地道に研究を進めていくべきだという考えを表明した。

(3) 日本語で『鄭子家喪』を解説したものとしては、金城竹村二〇〇九がある。

(4) ネット上の論文によつては、掲載後にコメントが大量に寄せられ、それらのコメントが論文に續いて掲載されるものがある。この種のもの學術上の扱いはなかなか難しい場合があるが、本稿ではそういった學術論文の形式をとらない見解群を正式な先行研究とは見做さず、引用もしないこととした。

竹簡形制一覽

簡號	字數	全長	契口數	頭	1	2	末	備考
甲 1	34	33.2 cm	2	9.5 cm	15.7 cm	8.0 cm	2	完簡。
甲 2	33	33.2 cm	2	9.5 cm	15.6 cm	8.1 cm	2	完簡。
甲 3	36	33.1 cm	2	9.5 cm	15.6 cm	8.0 cm	2	完簡。

乙 7	乙 6	乙 5	乙 4	乙 3	乙 2	乙 1	甲 7	甲 6	甲 5	甲 4
28	33	30	24	32	34	30	31	32	33	33
46.8 cm	45.4 cm	47.5 cm	34.0 cm	44.0 cm	46.7 cm	47.4 cm	33.2 cm	33.1 cm	33.2 cm	33.2 cm
2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
13.6 cm	13.6 cm	13.5 cm	13.6 cm	12.9 cm	13.6 cm	13.0 cm	9.5 cm	9.5 cm	9.5 cm	9.5 cm
22.8 cm	22.8 cm	22.8 cm	20.4 cm	23.0 cm	21.8 cm	22.5 cm	15.5 cm	15.4 cm	15.5 cm	15.6 cm
10.4 cm	9.0 cm	11.2 cm	0.0 cm	8.1 cm	11.3 cm	11.9 cm	8.2 cm	8.2 cm	8.2 cm	8.1 cm
斷絶有り。上段 33.3 cm、下段 13.5 cm。	上端少し缺損有り。下 端缺損有り。	完簡。	上・下端缺損有り。	上・下端缺損有り。	上端平頭。下端缺損 有り。	上端缺損有り。下端 平頭。	完簡。	完簡。	完簡。	完簡。

※「字數」は墨塊・殘缺字を含まない。合文は一字と數える。「頭く1」・「1く2」・「2く末」は契口番號とその距離を示す。

〔釋文〕〔一〕

甲本

奠子豸喪【二二】、鄭【三三】人來告。臧王豸夫而與之言曰、奠子豸殺丌君。不穀日欲巳告夫、巳邦之愆【四】（以上、第一號簡）、巳急【五】。於含而【六】遂楚邦凶爲者侯【七】正。含奠子豸殺丌君、酒保【八】丌慝【九】炎【一〇】、巳豸人青【二三】丌古。王命會之曰、奠子（以上、第三號簡）豸運【二四】遠天下之豐、弗懼入思【二五】槐神之不恙【二六】、感惻【二七】丌君。余【二八】酒必凶子豸、母巳城明【二九】立於上、而威【三〇】（以上、第四號簡）炎【三一】於下。奠人命巳子良爲鞮【三二】命、思子豸利木三眷【三三】、紕索巳縶、母敢【三四】丁【三五】門而出、鞮【三六】之域至（以上、第五號簡）。王許之。市未還、晉人涉、酒救奠。王酒還。夫皆進曰、君王之起此市、巳子豸之古。含晉（以上、第六號簡）人酒救子豸、君王必進市巳邊【二七】之、王安還軍巳邊之。與之戩【二八】於兩棠、大敗【二九】晉巾女（焉）【三〇】■【三一】（以上、第七號簡）。

乙本

〔奠（鄭）〕子豸（家）喪、鄭（邊）人來（來）告。臧（莊）王豸（就）夫（大夫）而與之言曰、奠（鄭）子豸（家）殺丌（其）君。不穀（穀）日欲巳（以）告夫（大夫）、巳（以）（以上、第一號簡）邦之愆（病）、巳（以）急。於含（今）而遂（後）楚邦凶（應）爲者（諸）侯（侯）正。〔含（今）〕奠（鄭）子豸（家）殺丌（其）君、酒（將）保丌

(其) 慝(恭) 炎(嚴)、巳(以) 及入没√内(入) 墜(地)。女(汝) 上帝「槐(鬼)」(以上、第二號簡)「神」巳(以) 爲惹(怒)、虐(吾) 廼(將) 可(何) 巳(以) 會(答)。售(雖) 邦之愆(病)、廼(將) 必爲市(師)。乃起(起) 市(師) 回(圍) 奠(鄭) 三月。奠(鄭) 人情(請) 元(其) 古(故)。王命會(答) 之「曰、奠(鄭)」(以上、第三號簡)「子」彖(家) 遁(顛) 復(覆) 天下之豊(禮)、弗思「三二」槐(鬼) 神之不恙(祥)、慝(戕) 惻(賊) 元(其) 君。我廼(將) 必凶(思) 子彖(家)、[母] 巳(以) 城(盛) 明(名) 立(位) 於上、而威炎(嚴) 於[以上、第四號簡] 下。奠(鄭) 人命 巳(以) 子良爲鞶(執) 命、凶(思) 子彖(家) 利(梨、割) 木三脊(寸)、紕(疏) 索 巳(以) 紕(紘)、母敢丁(當、經) 門而出、鞶(掩) 之城(以上、第五號簡) 互(基)。王許之。市(師) 未還、晉人涉、廼(將) 救奠(鄭)。王廼(將) 還。夫(大夫) 皆進曰、君王之起(起) 此市(師)、巳(以) 子彖(家) 之古(故)。含(今) 晉「人」(以上、第六號簡)「廼(將) 救」子彖(家)、君王必進市(師) 巳(以) 起(起) 之、王安(乃) 還軍 巳(以) 起(起) 之。與之戰(戰) 於兩棠、大敗晉市(師) 女(焉) (以上、第七號簡)。

〔訓讀〕

甲本

奠(鄭)の子彖(家) 喪(亡) 【三三】し、鄒(邊) 【三四】人奎(來)り告ぐ。臧(莊) 王夫(大夫)に稟(就) 【三五】きて之と與に言いて曰く、「奠(鄭)の子彖(家)、丌(其)の君を殺す。不穀(穀)、日(ひび) 【三六】に巳(以)て夫(大夫)に告げ、巳(以)て邦の愆(病) 【三七】とし(以上、第一號簡)、巳(以)て急ならんと欲す。

含(今)に於いて而る遠(後)【三八】に楚邦をして者(諸)侯(侯)の正【三九】を爲さ凶(思)【四〇】めん。含
 (今)、奠(鄭)の子豸(家)、元(其)の君を殺し、廼(將)に元(其)の慝(恭)炎(嚴)【四一】を保ち、己(以)
 て墜(地)に墜(沒)内(入)せん。女(如)【四二】し上帝槐(鬼)〔以上、第二號簡〕神己(以)て惹(怒)
 を爲さば、虚(吾)廼(將)た可(何)を己(以)て會(答)えん。售(唯)【四三】だ邦の瘵(病)のみは、廼(將)
 に必ず市(師)を爲(もち)【四四】いんとす。」と。乃ち市(師)を起(起)【四五】し奠(鄭)を回(圍)【四六】
 むこと三月。奠(鄭)人元(其)の古(故)を青(請)【四七】う。王、之に命(つ)げ會(答)えて曰く、「奠(鄭)
 の子(以上、第三號簡)豸(家)、天下の豊(禮)を違(顛)覆(覆)【四八】し、槐(鬼)神の不恙(祥)【四九】
 を思わず、元(其)の君を憾(戕)惻(賊)【五〇】す。余廼(將)に必ず子豸(家)をして、城(盛)明(名)
 【五一】を己(以)て上に立(位)する母く、而して下に炎(嚴)【五二】を威(以上、第四號簡)さ凶(思)【五三】
 めんとす。」と。奠(鄭)人、命ずるに子良を己(以)て命を報(執)【五四】ら爲め、子豸(家)をして木を利(鄭)
 割(く)こと三眷(寸)【五五】、紕(疏)索己(以)て絰(紘)【五六】せ思め、敢えて門を丁(當)【五七】て出
 すこと母く、之を城互(基)に殺(掩)【五八】う〔以上、第五號簡〕。王、之を許す。市(師)未だ還らず、晉人涉
 り、廼(將)に奠(鄭)を救わんとす。王、廼(將)に還らんとす。夫(大夫)皆進みて曰く、「君王の此の市(師)
 を起(起)つは、子豸(家)の古(故)を己(以)てなり。含(今)、晉(以上、第六號簡)人廼(將)に子豸(家)
 を救わんとす、君王必ず市(師)を進めて己(以)て之を逸(應)【五九】えよ。」と。王、安(乃)【六〇】ち軍を
 還して己(以)て之を逸(應)う。之と兩棠【六一】に戰(戰)い、大いに晉市(師)を敗る。■〔以上、第七號簡〕。

【六一】

〔現代語譯〕

甲本

鄭の子家が亡くなり、邊境守備の役人がやってきてそのことを通告した。(楚の) 莊王は大夫たちのところへ赴き、彼らと話していうようには、「鄭の子家は自分の主君を殺した。私は日々大夫たちにこのことを告げ、これが(楚) 國の病であり、急を要することであると告げようとしている。今後は楚國を諸侯の覇者としようではないか。今、鄭の子家は自分の主君を殺し、その恭しく嚴かな格式を保ち、その地に没入しようとしている。もし上帝鬼神がお怒りになれば、私はいかにお答えすればよいのか。(楚) 國の病だからこそ、(鄭に對して) 軍を用いるのだ。」と。そこで軍を發し、三ヶ月間鄭を包圍した。鄭の人がその理由を尋ねた。(莊) 王はこれに告げ答えていうようには、「鄭の子家は天下の禮を覆し、鬼神の不吉を思わず、その主君を傷つけ害した。私は子家が名を盛んにすることによって上位に位させることなく、かえってその威嚴を下位に滅ぼそうとするのである。」と。鄭の人は子良に命令を出させ、子家に棺の木を三寸に割り、それを粗末な繩で束ねさせた上で、門から出すことのないようにさせ、子家の遺體を城壁の下に埋めさせた。(莊) 王はこれを許可した。楚の軍が撤兵せずにいると、晉の人は渡河し、鄭を救援しようとした。(莊) 王は撤退しようとした。大夫たちはみな進み出て、「君王たるあなた様がこの軍を發したのは、子家のことがあったからです。今、晉の人は子家を救おうとしております。あなた様は軍を進めてこれを迎撃して下さい。」と。そこで(莊) 王は軍を引き返して晉軍を迎撃した。その晉軍と兩棠で戦い、大いにこれを撃破した。

[參考]

『左傳』宣公四年

夏、六月乙酉、鄭公子歸生弑其君夷。

楚人獻鼃於鄭靈公。公子宋與子家將見。子公之食指動、以示子家曰、他日我如此、必嘗異味。及入、宰夫將解鼃、相視而笑。公問之、子家以告。及食大夫鼃、召子公而弗與也。子公怒、染指於鼎、嘗之而出。公怒、欲殺子公。子公與子家謀先。子家曰、畜老猶憚殺之、而況君乎。反譖子家。子家懼而從之。夏、弑靈公。書曰、鄭公子歸生弑其君夷。權不足也。君子曰、仁而不武、以無能達也。凡弑君、稱君、君無道也。稱臣、臣之罪也。鄭人立子良。辭曰、以賢則去疾不足。以順則公子堅長。乃立襄公。襄公將去穆氏而舍子良。子良不可曰、穆氏宜存、則固願也。若將亡之、則亦皆亡、去疾何爲。乃舍之、皆爲大夫。

夏、六月乙酉、鄭の公子歸生、其の君夷を弑す。

楚人、鼃を鄭の靈公に獻ず。公子宋と子家と將に見えんとす。子公の食指動き、以て子家に示して曰く、「他日我此くの如くんば、必ず異味を嘗めり。」と。入るに及び、宰夫將に鼃を解かんとし、相視て笑う。公、之を問ひ、子家以て告ぐ。大夫に鼃を食せしむるに及び、子公を召して與えざるなり。子公怒り、指を鼎に染め、之を嘗めて出づ。公怒り、子公を殺さんと欲す。子公と子家と先んずるを謀る。子家曰く、「畜の老いたるすら猶お之を殺すを憚る、而るを況んや君をや。」と。反て子家を譖せんとす。子家懼れて之に従う。夏、靈公を弑す。書して曰く、「鄭の公子歸生、其の君夷を弑す。」とは、權足らざればなり。君子曰く、「仁にして武あらざれば、

以て能く達する無きなり。」と。凡そ君を弑する、君を稱するは、君無道なり。臣を稱するは、臣の罪なり。鄭人、子良を立てんとす。辭して曰く、「賢を以てすれば則ち去疾足らず。順を以てすれば則ち公子堅長ぜり。」と。乃ち襄公を立つ。襄公將に穆氏を去りて子良を舍かんとす。子良可かずして曰く、「穆氏宜しく存すべきは、則ち固より願うなり。若し將に之を亡さんとすれば、則ち亦皆亡びん、去疾何ぞ爲さん。」と。乃ち之を舍き、皆大夫と爲す。

同宣公十年

鄭子家卒。鄭人討幽公之亂、斲子家之棺、而逐其族。改葬幽公、諡之曰靈。鄭の子家卒す。鄭人、幽公の亂を討ち、子家の棺を斲りて、其の族を逐う。幽公を改葬し、之に諡して靈と曰う。

『史記』鄭世家

靈公元年春、楚獻黿於靈公。子家子公將朝靈公、子公之食指動。謂子家曰、佗日指動、必食異物。及入見靈公進黿羹。子公笑曰、果然。靈公問其笑故、具告靈公。靈公召之、獨弗予羹。子公怒、染其指、嘗之而出。公怒、欲殺子公。子公與子家謀先。夏、弑靈公。鄭人欲立靈公弟去疾。去疾讓曰、必以賢、則去疾不肖。必以順、則公子堅長。堅者靈公庶弟去疾之兄也。於是乃立子堅、是爲襄公。襄公立、將盡去繆氏。繆氏者殺靈公子公之族家也。去疾曰、必去繆氏、我將去之。乃止。皆以爲大夫。襄公元年、楚怒鄭受宋賂縱華元、伐鄭。鄭背楚、與晉親。五

年、楚復伐鄭、晉來救之。六年、子家卒。國人復逐其族、以其弑靈公也。七年、鄭與晉盟鄆陵。八年、楚莊王以鄭與晉盟來伐、圍鄭三月、鄭以城降楚。楚王入自皇門、鄭襄公肉袒擊羊以迎曰、孤不能事邊邑、使君王懷怒以及弊邑、孤之罪也。敢不惟命是聽。君王遷之江南、及以賜諸侯、亦惟命是聽。若君王不忘厲宣王桓武公、哀不忍絕其社稷、錫不毛之地、使復得改事君王、孤之願也。然非所敢望也。敢布腹心、惟命是聽。莊王爲郟三十里、而後舍。楚羣臣曰、自郟至此、士大夫亦久勞矣。今得國舍之、何如。莊王曰、所爲伐、伐不服也。今已服、尚何求乎。卒去。晉聞楚之伐鄭、發兵救鄭。其來持兩端、故遲。比至河、楚兵已去。晉將率或欲渡、或欲還、卒渡河。莊王聞、還擊晉。鄭反助楚、大破晉軍於河上。

靈公元年春、楚、龍を靈公に獻ず。子家・子公將に靈公に朝せんとし、子公の食指動く。子家に謂いて曰く、「佗日指動けば、必ず異物を食せり。」と。入りて靈公に見えるに及び龍羹を進む。子公笑いて曰く、「果して然り。」と。靈公其の笑う故を問ひ、具に靈公に告ぐ。靈公之を召して、獨り羹を予えず。子公怒り、其の指を染め、之を嘗めて出す。公怒り、子公を殺さんと欲す。子公と子家と先んせんと謀る。夏、靈公を弑す。鄭人靈公の弟去疾を立てんと欲す。去疾讓りて曰く、「必ず賢を以てすれば、則ち去疾不肖なり。必ず順を以てすれば、則ち公子堅長ぜり。」と。堅は靈公の庶弟、去疾の兄なり。是に於いて乃ち子堅を立つ、是れを襄公と爲す。襄公立ち、將に盡く繆氏を去らんとす。繆氏は靈公を殺せし子公の族家なり。去疾曰く、「必ず繆氏を去らんとせば、我將に之を去らんとす。」と。乃ち止む。皆以て大夫と爲す。襄公元年、楚、鄭の宋の路を受けて華元を縦すを怒り、鄭を伐つ。鄭、楚に背き、晉と親しむ。五年、楚復た鄭を伐ち、晉來りて之を救う。六年、子家卒す。國人復た其の族を逐うは、其の靈公を弑するを以てなり。七年、鄭と晉と鄆陵に盟す。八年、楚の莊王、鄭

と晉と盟するを以て來伐し、鄭を圍むこと三月、鄭、城を以て楚に降る。楚王、皇門自り入り、鄭の襄公、肉袒擊羊し以て迎えて曰く、「孤、邊邑に事うる事能わず、君王をして怒りを懷き以て弊邑に及ばしむるは、孤の罪なり。敢て惟だ命を是れ聽かざらんや。君王之を江南に遷し、及び以て諸侯に賜うも、亦惟だ命を是れ聽かん。若し君王、厲・宣王、桓・武公を忘れず、哀みて其の社稷を絶つを忍びず、不毛の地を錫い、復た改めて君王に事うるを得しめば、孤の願なり。然れども敢て望む所に非ざるなり也。敢て腹心を布く、惟だ命を是れ聽かん。」と。莊王爲めに卻くこと三十里、而る後に舍す。楚の羣臣曰く、「郢自り此に至り、士大夫亦久しく勞す。今國を得て之を舍つるは、何如。」と。莊王曰く、「伐つを爲す所は、服せざるを伐つなり。今已に服す、尚お何をか求めんや。」と。卒に去る。晉、楚の鄭を伐つを聞き、兵を發して鄭を救う。其の來るや兩端を持す、故に遅れたり。河に至る比い、楚の兵已に去る。晉の將率或いは渡らんと欲し、或いは還らんと欲し、卒に河を渡る。莊王聞き、還りて晉を撃つ。鄭、反て楚を助け、大いに晉の軍を河上に破る。

注

【一】甲乙兩本はほぼ同一の内容であるため、訓讀文・現代語譯は甲本のみ掲げ、注では乙本が議論になる場合にのみ言及する。釋文・訓讀文においては、地の文で隸定字を掲げ、○内は假借字、□内は原簡に無い字を補つたこと、△内は誤寫を訂正したことを示す。現代語譯では○内で意味を補つたことを示す。注釋は原則として、釋文には文字の隸定、訓讀文には假借字の判定や前後の文章の意味内容という具合につけている。但し、説明の流れから、釋文の注で假借字についても適宜触れるなどといったことがある。

【二】上海博楚簡だけではなく、郭店楚簡などにも同様の字がみられる。今のところは研究者により、「喪」・「亡」・「𣦵」に作るなど、まちまちである。陳佩芬二〇〇八・陳偉二〇〇八・陳偉二〇〇九は「喪」、復旦出土二〇〇八は「𣦵(亡)」に作る。この字の隸定によって、本篇の内容解釋が變わってくる場合がある。『左傳』宣公四年(前六〇五年)に鄭の子公(公子宋・子家(公子歸生)が鄭の靈公を殺す記事があり、六年後の同十年(前五九九年)に子家が没し、靈公殺害から八年後の同十二年(前五九七年)に晉・楚の鄆の戦いが起きている。陳佩芬二〇〇八は、靈公が殺された後で子家が「喪」を行うところから話が始まると考え、本篇末の「兩棠」を「鄆」のこととし、本篇を『左傳』宣公四年から十二年の事件について書かれたものとする。凡國棟二〇〇八も陳佩芬説を前提として論じている。だが復旦出土二〇〇八は、本篇は楚の莊王が「鄭子家亡」を聞いて兵を發して鄭を伐つたものであり、明らかに八年も経つてからのことではないとする。陳偉二〇〇九は陳佩芬説を支持する。文脈からいえば復旦出土二〇〇八の説明が理に適っており、ここは子家の死を表す表現の方が、後の文章にうまく接続する。それでも本文で莊王が急を要すると語っている割には、『左傳』だと子家の死から楚軍の出動まで二年も経過している。この説話では子家の死から鬢髪を入れず楚軍が出動しているように受け取れる。ところで『説文解字』に「喪」について、「亡也。从哭亡、亡亦聲。」とあり、どちらにせよ、同じ意味で讀むことはできる。ひとまずここは標題通り「喪」に作った上で「亡」と讀んでおく。

【三】陳佩芬二〇〇八は「鄆」に作る。陳偉二〇〇八・復旦出土二〇〇八・陳偉二〇〇九は「鄆」に作る。復旦出土二〇〇八は『曹沫之陳』にも用例が見えることを指摘して、本篇甲・乙本文の文字の右下部が譌變の形とする。ここは陳偉二〇〇八らに従う。

【四】陳佩芬二〇〇八は「慴」、陳偉二〇〇八は「慴」、復旦出土二〇〇八は「𣦵」に作る。陳偉二〇〇八は、楚簡では「病」の字が「方」に従うことを指摘し、ここは別種の書法かもしれないとする。張新俊二〇〇九は上旁が楚文字の「丙」ではないとして「𣦵」に作る。李天虹二〇〇九は張新春二〇〇九に従う。圖版を忠實に反映するという觀點からいえば復旦出土

二〇〇八・張新俊二〇〇九がよい。ただ後に出る「鬼」に讀む字では、下傍の「示」を左傍に隸定しており、方針が一貫していない。文字の構成要素は同じであり、どちらでもよいように思われる。ここは復旦出土二〇〇八に従っておく。

【五】陳佩芬二〇〇八は「愆」に作り、『集韻』で「急」に同じとあることを指摘し、ここで文を區切らず、第1號簡末で區切る。陳偉二〇〇八は「愆」に作り、ここに句點を入れ、「而後」で文を區切る。凡國棟二〇〇八は「及」と讀み、至るの意とし、「於今」で文を區切る。復旦出土二〇〇八は上旁を「及」に隸定する必要はないとして「急」に作り、前の「日」に呼應するとして、ここで文を區切る。陳偉二〇〇九は隸定と文の區切りは陳偉二〇〇八のまま、假借は凡國棟二〇〇八Aに従う。李天虹二〇〇九は陳偉二〇〇九に従うが、文の區切りは凡國棟二〇〇八Aと同じである。宋華強二〇〇九Aは「以及於今而後」のように連讀し、「以及於今」と同じ意とする。ここは復旦出土二〇〇八に従う。

【六】陳佩芬二〇〇八・陳偉二〇〇八・凡國棟二〇〇八A・復旦出土二〇〇八は「而」に作る。侯乃峰二〇〇九Aは本篇の「而」・「天」字を比較し、諸家の隸定は次の「後」字に引きずられたものであって、ここは明らかに「天」に作るべきだとする。李天虹二〇〇九は侯乃峰二〇〇九Aに従う。『史記』魯周公世家などに「於今而後」の語がある。圖版より、諸家の隸定に従う。

【七】陳佩芬二〇〇八・陳偉二〇〇八は「侯」、復旦出土二〇〇八は「侯」に作る。ここは陳佩芬の隸定でよいように思われるが、ひとまず字形の近い「疾」に作っておく。

【八】陳佩芬二〇〇八は「保」に作り、『集韻』「保、隸作保。」などを引用する。陳偉二〇〇八・復旦出土二〇〇八は「保」に作る。圖版により、「保」に作る。

【九】陳佩芬二〇〇八は「憚」に作り、復旦出土二〇〇八・劉信芳二〇〇九は「憚」に作る。圖版により、復旦出土二〇〇八に従う。

【一〇】諸家「炎」に作るが、陳偉二〇〇八・陳偉二〇〇九は、包山楚簡二七〇・二七二號簡の「靈光」の「光」に似ていると

し、乙本の「炎」を誤寫ではないかとする。諸家に従う。

【一二】この文字、乙本では「及」である。陳佩芬二〇〇八・陳偉二〇〇八・陳偉二〇〇九は「及」に作る。復旦出土二〇〇八は、いずれかが誤りであって、文脈から甲本が正しいとし、「𠄎(没)」に作る。そして、陳佩芬二〇〇八はこの前後を地下に入ること、つまり死ぬことをいうとするが、復旦出土二〇〇八はこれを否定し、埋葬行為をいうとする。また、陳偉二〇〇九は復旦出土二〇〇八の説を、文の意味が通らないとして否定する。李天虹二〇〇九・劉信芳二〇〇九は復旦出土二〇〇八に従う。李松儒二〇〇九は乙本の「及」を「没」の誤字とする。李守奎・曲冰・孫偉龍編著『上海博物館藏戰國楚竹書(一—五)文字編』(作家出版社、北京、二〇〇七年十二月)ではこの文字を「𠄎」に作る。ここは説得力のある復旦出土二〇〇八に従う。なお『曹沫之陳』第9號簡に、「没」に假借する用例がみえる。

【一二】陳佩芬二〇〇八は「唯」、陳偉二〇〇八は「雖」、復旦出土二〇〇八は「售」に作る。口の位置から「唯」・「售」の二種類に分けて隸定されることもあるが、意味は同じである。圖版により、「售」に作る。

【一三】陳佩芬二〇〇八は「昏」、何有祖二〇〇八は「青」字が認められるとし、乙本によって「情」に作る。陳偉二〇〇八・陳偉二〇〇九は「青」に作る。復旦出土二〇〇八は「喜」に作る。圖版により、「青」に作る。

【一四】陳佩芬二〇〇八は「選」、陳偉二〇〇八は「顛」、復旦出土二〇〇八は「選」に作る。圖版により、「選」に作る。

【一五】諸家「悞」に作るが、單育辰二〇〇九がいうように、乙本は「思」に作る。李松儒二〇〇九がいうように、甲本が乙本を参照した可能性が高い。ここは「悞」の誤字としておく。

【一六】陳佩芬二〇〇八は「恙」に作り、陳偉二〇〇八・復旦出土二〇〇八は「恙」に作る。ここは「恙」に作っておく。

【一七】何有祖二〇〇八は「測」に作っているが、諸家の隸定に従う。

【一八】陳佩芬二〇〇八は「𠄎」のままにしている。陳偉二〇〇八は、楚の月名の「荊扈」等の二文字目を秦簡で「夷」に作ることから、「夷」に作る。『史記』鄭世家にあるように、鄭の靈公夷の個人名とする。復旦出土二〇〇八は、乙本が「我」に

作ることから、文字の上部を書き損じたものとして「余」に作る。陳偉二〇〇九も「夷」に作るが、これと「餘」とが通假する例があることから、「余」と讀むべきかと述べる。李松儒二〇〇九は上旁が「尸」であり、これは乙本を底本として書き寫したものであるとし、「我」に作る。宋華強二〇〇九Bは李松儒二〇〇九に從う。ここは復旦出土二〇〇八に從い、書き損じとして「余」に作っておく。

【一九】陳佩芬二〇〇八・陳偉二〇〇八・復旦出土二〇〇八は「名」に作る。圖版により、「明」に作る。

【二〇】陳佩芬二〇〇八が「戒」に作っているように、左下旁が「大」字のようにも見えるが、凡國棟二〇〇八Bは文脈からも「滅」に作るべきだろうとする。高祐仁二〇〇九はこれに從う。復旦出土二〇〇八は「威」に作る。『說文解字』に「威、滅也。从火戔。火死于戔，陽氣至戔而盡。詩曰，赫赫宗周，褒似威之。」とある。ここは圖版により「威」に作り、假借字はとらないでおく。

【二一】陳佩芬二〇〇八は「鼎？」とする。凡國棟二〇〇八B「復」に作り、「覆」と讀む。復旦出土二〇〇八は「亦」に從う字であることを指摘する。高祐仁二〇〇九は「炎（嚴）」（威嚴の意）に作る。圖版をよく見ると、高祐仁二〇〇九のいうように「炎」のように見えなくもない。ひとまず後の注【四二】にならない、「炎（嚴）」に作り、「嚴」と讀んでおく。

【二二】陳佩芬二〇〇八は「𦘔」に作り、「執」と讀み、「執命」で命令を執行する意とする。陳偉二〇〇八は「執」に作り、ここで文を區切つて「質」と讀み、この後の「命思」を連語で使役の意にとる。復旦出土二〇〇八は「執」に作る。陳偉二〇〇九は「贊」・「摯」と「質」との通假例があることを指摘する。李天虹二〇〇九は陳偉二〇〇八に從うが、「命」を「盟」と讀む。圖版により、「𦘔」に作り、「執」と讀み、續く「命」を命令の意、「思」を使役として解釋する。

【二三】陳佩芬二〇〇八は「𦘔」に作る。陳偉二〇〇八は「𦘔」・「旨」に從うとし、「尊」に作るのではないかとする。羅小華二〇〇八は陳偉説に從いながら「𦘔」に作る。陳偉二〇〇九では「尊」に作る部分削除されている。ここは陳佩芬二〇〇八に從うておく。

【二四】陳佩芬二〇〇八・陳偉二〇〇八は「敢」、復旦出土二〇〇八は「敢」に作る。圖版により、復旦出土二〇〇八に従う。

【二五】陳佩芬二〇〇八は「ム」に作り、「私」と釋する。何有祖二〇〇八は「巳」に作る。復旦出土二〇〇八は、「語叢」三四五號簡・『容成氏』第五一號簡・『從政』甲本第一六號簡で「犯」に讀む字の例を挙げながら「丁」に作る。程燕二〇〇八は同じ資料について、「ム」・「巳」とは明らかに字形が異なるとし、「夕」に作る。陳偉二〇〇九・劉信芳二〇〇九・劉雲二〇〇九・李松儒二〇〇九は復旦出土二〇〇八に従う。ここは復旦出土二〇〇八に従う。

【二六】陳佩芬二〇〇八は「敎」、復旦出土二〇〇八・陳偉二〇〇九・劉信芳二〇〇九は「敎」に作る。圖版により、復旦出土二〇〇八などに従う。

【二七】陳佩芬二〇〇八は「迄」、何有祖二〇〇八・復旦出土二〇〇八・陳偉二〇〇九・楊澤生二〇〇九は「迄」、陳偉二〇〇八は「乃」に作る。圖版により、「迄」に作る。この字は何琳儀二〇〇四・六頁が指摘するように新蔡楚簡にもみえ、何琳儀は「往」・「及」の意としている。本字は『東大王泊旱』第一七號簡にもみられ、陳斯鵬二〇〇五は「起」ではなく、その書き誤りであるとしている。何有祖二〇〇八らに従う。

【二八】陳佩芬二〇〇八は「戰」に作り、「戰」に同じとする。陳偉二〇〇八・復旦出土二〇〇八は「戰」に作る。圖版により、陳佩芬二〇〇八に従う。

【二九】陳佩芬二〇〇八・陳偉二〇〇八・復旦出土二〇〇八は「敗」に作る。圖版により、「敗」に作る。

【三〇】陳佩芬二〇〇八は「安」、陳偉二〇〇八は「焉」、復旦出土二〇〇八は乙本により「女」に作る。圖版により、復旦出土二〇〇八に従う。

【三一】本篇の文末符號である。陳佩芬二〇〇八はその下に一文字分の空白があり、本文の終わりを示すとす。

【三二】諸家「悵」に作るが、單育辰二〇〇九は「思」に作る。李松儒二〇〇九は「思」とするが「畏」の誤字とする。圖版により、單育辰二〇〇九に従う。

【三三】「喪」について。注【二】で述べたように、「亡」の假借字としておく。

【三四】陳佩芬二〇〇八は「郛」と讀んで春秋時代の息國のこととする。陳偉二〇〇八・復旦出土二〇〇八・陳偉二〇〇九は「邊」と讀み、次の「人」とあわせて邊境守備の人員のこととする。凡國棟二〇〇八Aは、この字が『鮑叔牙與隰朋之諫』第五號簡の「息」または「憂」に釋される文字とは明らかに異なるとし、包山楚簡でこの旁を含む文字をとりあげながら、やはり「邊」と讀む。陳偉らが指摘するように、『國語』魯語上に「晉人殺厲公、邊人以告。」「邊人、疆場之司也。」とある。ここは陳偉二〇〇八らの讀みに従う。

【三五】「就」について。陳偉二〇〇九は使役の用法にとり、大夫を前に來させる意味とする。李天虹二〇〇九は、『平王問鄭壽』第一號簡「競平王就鄭壽……」、「玉篇」「就、從也。」を引用し、その「就」に使役の用法とする説（引見するの意、陳偉二〇〇九）、および訪問するの意とする説（凡國棟二〇〇七）の二説があるが、後者が比較的良好と述べる。巫雪如二〇〇九も後者を支持する。宋華強二〇〇九Cは「就」が從母幽部、「肅」・「宿」が心母覺部で互いの聲母が齒頭音、韻部が對轉關係にあるとし、また「赤」聲と「就」聲、「肅」聲・「宿」聲の字がそれぞれ通假し、「速」が心母屋部、「覺」・「屋」は傍轉だから「速」と「肅」・「宿」が通假するとし、『儀禮』公食大夫禮「親戒速、迎賓于門外。」、同鄉飲酒禮・鄉射禮「速賓」の鄭注「速、召也。」を引用したり、殷墟花園莊東地卜辭に貴族が商王を「速」するといった用例がよく見られ（陳劍二〇〇四）、春秋前期の叔父父簋に「用速先後諸兄」、「詩經」小雅伐木篇に「以速諸父」とあることを述べて、「速」と讀み、招待するの意とする。ここは李天虹二〇〇九に従い、訪問するの意にとる。

【三六】陳偉二〇〇八は、『左傳』文公七年「日衛不睦、故取其地。」杜注「日、往日。」「國語」晉語一「日、君以驪姬爲夫人、民之疾心固皆至矣。」韋昭注「日、昔日也。」を引用し、この楚の莊王と大夫の會話は、子家の亂から時間が経っているからだとする。張新俊二〇〇九は子家が靈公を殺害した前六〇五年は、楚でも若敖氏の内亂が起きており、本篇の内容はそれを反映しているとする。次の注における字釋が議論の前提となっていることはいうまでもない。陳偉二〇〇九は『易』大畜「剛健

篤實輝光、日新其德。」孔穎達疏「故能輝耀光榮、日日增新其德。」を引用し、陳偉二〇〇八の解釋を撤回する。李天虹二〇〇九は、本篇の子家に關する内容が、『春秋』經と完全に一致しているとする。

【三七】陳佩芬二〇〇八は、『說文解字』「恟、憂也。从心丙聲。」、『詩』小雅頌弁篇「憂心恟恟。」、『玉篇』「恟、憂也、懼也。」を引用し、「憂い」の意味で解釋している。凡國棟二〇〇八もこれに従う。陳偉二〇〇八・復旦出土二〇〇八・陳偉二〇〇九・李天虹二〇〇九は、「病」と讀む。復旦出土二〇〇八は、その前の「以」を「甚」の意とする。『從政』甲篇第八號簡・『季康子問於孔子』第九號簡でも圖版本では「恟」に假借されている（陳劍二〇〇六は「猛」の假借字とする）。「邦」について、陳佩芬二〇〇八は鄭のこととするが、陳偉二〇〇八は楚のこととする。張新俊二〇〇九はこの字の上旁とする「侯」が匣母侯部で、曉母東部の「誦」と陰陽對轉にあり、聲母がいずれも喉音であるとして、「誦」と讀み、禍亂の意とし、前の「邦」を楚國のこととする。自國のことを言う場合は、國名をつけない方が自然である。ここは陳偉二〇〇八らの讀みが説得的である。

【三八】諸家「後」と讀むが、侯乃峰二〇〇九Aはこの前の字を「天」に隸定したことに合わせて、いずれも侯部匣紐に屬することとして、ここを「厚」と讀む。隸定を諸家に従ったので、ここも同様に諸家に従う。

【三九】「正」について。陳偉二〇〇八・陳偉二〇〇九は官長の意とし、ここは諸侯の盟主を擔當することとする。凡國棟二〇〇八Aは「君」・「長」の意とし、『墨子』親士篇「昔者文公出走而正天下。」に關する王念孫の説（天下に君たりの意）を引用し、諸侯の君長・覇者の意とする。復旦出土二〇〇八は、「主宰」のこととし、この一文を、これからは楚國が諸侯の支配を行うべきである、という意味に解釋する。また、楚の大夫たちは少なくとも六年前の鄭の靈公殺害を夙に知っていたが、楚の莊王は時機が未だ至らざることを感じ、それまでずっと言い出さなかつただけだとする。郝士宏二〇〇九は『爾雅』釋詁「正、長也。」郭璞注「正伯、皆官長。」などを引用し、「長」の意とする。陳偉らの解釋が妥當なところだろう。

【四〇】陳佩芬二〇〇八は、ここに限らず「思」を「考える」の意にとっている。陳偉二〇〇八は『禮記』曲禮上「儼若思。」孔

穎達疏「思、計慮也。」を引用し、「司」に讀めるのではないかとし、職掌の意とする。復旦出土二〇〇八は、沈培二〇〇五を引用し、「應」「當」に訓する。侯乃峰二〇〇九Aは「使」と讀む。陳偉二〇〇九は「斯」(「是」)と讀む。また、ここはそのまま使役の意味で讀むことができる。ここは文脈から使役の意味で讀んでおく。(上海博楚簡研究會における大西克也氏・曹峰氏の意見を参考にした。)

- 【四二】陳佩芬二〇〇八は、下の「炎」と合わせて「懽愾」と讀み、その意味を『廣韻』が「不調」、『玉篇』が「多惡」とするのを引用し、この前後の文章を、その惡辣な所行を保ちつづけようとする意味とする。陳偉二〇〇八・陳偉二〇〇九は「寵光」と讀み、『左傳』昭公十二年「必亡。冥語之不懷、寵光之不宣、令德之不知、同福之不受、將何以在。」を引用する。復旦出土二〇〇八は、これを意味が迂遠であり、全然先秦時代の口語らしくないとする。そして文脈から子家の埋葬に關することと考え、「葬」「恭」が假借し、「炎」が云母談部、「嚴」が疑母談部に屬することから通假し得るとし、「恭嚴」と讀む。これに加えて、馬王堆帛書『老子』乙本「銛儻爲上」の前二字を通行本が「恬淡」「恬憺」、同『老子』甲本が「銛襲」、郭店楚簡『老子』が「銷繹」に作ることから、清淨安寧の意として「恬淡」と讀む可能性も述べる。ただ傳世文獻の用例が、『文子』道徳篇や『東觀漢記』沛獻王輔傳といった新しいものしかないことを述べている。侯乃峰二〇〇九Bは「寵(榮光の意)炎(權勢の意)」と讀み、「炎」は『宋史』李垂傳「趨炎附熱・趨炎附勢」の「炎」のような意味とする。用例が新し過ぎるのが難點か。劉信芳二〇〇九は復旦出土二〇〇九に従い、「恭嚴」と讀み、『說文解字』「恭、肅也。」「國語」楚語上「若先君善則請爲恭。」「說文解字」「炎、火光上也。」「段注引洪範「火曰炎上。」「詩」大田「秉彼炎火。」「傳」盛陽也。」などを引用し、これは榮光ある證號であり、よい名譽程度に理解しておくのがよいと述べる。文脈から復旦出土二〇〇八の假借に従う。
- 【四二】陳佩芬二〇〇八は「汝」、復旦出土二〇〇八は「如」の假借字とする。文脈より復旦出土二〇〇八に従う。
- 【四三】「售」について。諸家、「雖」と讀むが、文意が通じにくい。文脈から「唯」が適當か。『左傳』などには理由を示す「唯」の用例がみられる(上海博楚簡研究會における大西克也氏の意見)。

【四四】陳佩芬二〇〇八は、「經傳釋詞」爲、猶用也、用兵也。」を引用し、「もちいる」と讀む。

【四五】陳佩芬二〇〇八は、「左傳」昭公二十六年「王起師于滑」、杜預注「起、發也。」を引用し、兵を發する意とする。

【四六】陳佩芬二〇〇八は、この事を『史記』楚世家「十七年春、楚莊王圍鄭、三月克之。」の前五九七年の記事と同一とする。郝士宏二〇〇九は「三月」の前で文を區切り、これを月名とする。

【四七】陳佩芬は「問」、何有祖二〇〇八・陳偉二〇〇八・陳偉二〇〇九は「請」と讀む。何有祖二〇〇八らに従う。

【四八】陳佩芬二〇〇八は、その下と合わせて「顛覆」と讀み、『尚書』胤正「惟時義和、顛覆厥德」、孔安國傳「顛覆言反側。」「孟子」萬章上篇「太甲顛覆湯之典刑。」を引用し、傾き衰える意味とする。またその後の「天下之豊」について、『孟子』離婁上篇「皆曰天下國家」、趙岐注「天下謂天子之所主。」「左傳」昭公二十五年「子產曰、夫禮、天之經也、地之義也、民之行也。」を引用する。

【四九】陳佩芬二〇〇八・陳偉二〇〇八は「祥」の假借字とする。

【五〇】陳佩芬二〇〇八は「戕折」と讀み、戕害・傷害の意とする。何有祖二〇〇八・陳偉二〇〇八・復旦出土二〇〇八・陳偉二〇〇九は「戕賊」と讀む。何有祖らがいうように、『孟子』告子上篇「如將戕賊杞柳而以爲栲櫨、則亦將戕賊人以爲仁義與。」趙岐注「戕猶殘也。」とある。何有祖二〇〇八らに従う。

【五一】陳佩芬二〇〇八は「成名」と讀み、復旦出土二〇〇八はここが動賓構造であることを否定して「盛名」と讀む。陳偉二〇〇九は復旦出土二〇〇八に従う。復旦出土二〇〇八らに従う。

【五二】「炎」について。注【二二】により、「嚴」の假借字とする。

【五三】陳佩芬二〇〇八は、やはり「思」を「考える」の意にとる。復旦出土二〇〇八・陳偉二〇〇九は「使」と讀む。文脈から復旦出土二〇〇八に従う。

【五四】「褻」について。注【二二】により、「執」の假借字とする。

【五五】陳偉二〇〇八は「利」を「梨」、「尊」を「寸」と讀むのではないかとする。復旦出土二〇〇八は「利」を「梨」と讀む。また「眷」を「旨」に从う「弁」の聲とし、信陽長臺關楚簡の遺策に「寸」をこの字に作る例があるのを引用し、「寸」と讀む。沈培二〇〇三がこのことを詳述している。もしそうなら、この一文は「梨木三寸」と讀むことになるが、復旦出土二〇〇八は『禮記』檀弓篇「夫子制于中都、四寸之棺、五寸之槨。」「左傳』哀公二年「桐棺三寸、不設屬辟、下卿之罰也。」を引用し、當時みられる懲罰的措施としている。陳偉二〇〇九は「利」を「梨」（ㄇ割）、次の文字を「寸」と讀む。李天虹二〇〇九は陳偉二〇〇九に従い、あるいは文献に「利」と通假例のよく見られる「離」の假借字ではないかとする。ここは陳偉二〇〇九に従って讀んでおく。

【五六】陳佩芬二〇〇八は「疏索以供」と讀む。「紕」について『玉篇』に「亦疏字。」とあるのを引用し、「疏索」について『詩』大雅召旻「彼疏斯稗」、鄭箋「疏、麤也。」を引用し、極めて少ない意味とする。陳偉二〇〇八は「縉索」と讀み、子家を家に禁錮する措置を指す。復旦出土二〇〇八は「疏索」と讀み、粗末な棺を束ねる繩とする。復旦出土二〇〇八は「紕」を「紕」と讀み、「共」は見母東部、「紕」は匣母蒸部で、音が近く通假し、「束」の意とする。そして『廣雅』「紕、束也。」について、王念孫『廣雅疏證』「考工記輪人、良蓋弗冒弗紕、是凡言紕者、皆系束之義。」などを引用し、みな動詞「束」であることを指摘する。また、『左傳』宣公十年の子家卒の記事との關係について、關連する事件か、異なる版本の可能性を述べている。同宣公十二年の楚莊王が鄭を三ヶ月間圍み、「鄭伯肉袒牽羊以逆」とある記事については、本篇と狀況が異なることを指摘する。陳偉二〇〇九は復旦出土二〇〇八に従う。ここは復旦出土二〇〇八に従っておく。

【五七】何有祖二〇〇八は「犯」と讀み、この一文を城門をこじ開ける意とする。復旦出土二〇〇八は「丁」に隸定したものを「當」と讀む。程燕二〇〇八は「夕」が邪紐鐸部、「藉」が从紐鐸部で音が近く通假し得るとして「藉」と讀み、この一文を門を踏んで出ていくの意とする。郝士宏二〇〇九は「丁」が端紐耕部、「正」が照三耕部で音が極めて近いとし、「正」と讀

み、「丁門」を「正門」とする。陳偉二〇〇九は復旦出土二〇〇八に従う。李天虹二〇〇九は『爾雅』釋詁「丁、當也。」「詩」大雅雲漢「寧丁我躬。」毛傳「丁、當也。」を引用し、「丁」を「當」と讀むのがよいとする。劉信芳二〇〇九は假借を復旦出土二〇〇八に従うが、この門は廟門か殯宮門であり、『禮記』檀弓上「及葬、毀宗躡行、出于大門、殷道也。學者行之。」注「明不復有事於此。周人浴不掘中霤、葬不毀宗躡行。毀宗、毀廟門之西而出、行神之位在廟門之外。」孔穎達疏「廟門之西云廟門西邊牆也。」を引用し、周の禮によるなら、子家の喪は本來「不毀宗躡行」となるはずであるが、楚の圧力により門を出ることができず、廟の壁が毀たれ、宗廟に入ることができなかつたという意味だろうと述べる。劉雲二〇〇九は劉信芳二〇〇九の『禮記』檀弓上の解釋が誤っているといい、「丁」は端母耕部、「經」は見母耕部で古音が近いとし、「經」と讀み、經過の意で、この一文は門より出てはならないということだとする。ここは文脈より、劉雲二〇〇九に従う。

【五八】陳佩芬二〇〇八は「陷」と讀む。復旦出土二〇〇八は『昭王毀室』第三號簡の「塚（掩／掩）」、張家山漢簡『二年律令』金布律の「廁（掩）」を引用し、「掩」と讀む。また「城基」について、『水經注』河水「蒲昌海溢、盪覆其國、城基尚存而至大、晨發西門、暮達東門。」を引用し、城壁の基礎の意とする。陳偉二〇〇九は復旦出土二〇〇八に従う。劉信芳二〇〇九も假借を復旦出土二〇〇八に従うが、ここは墓葬が城壁の基礎を超えないよう制限する意とし（實際、古代貴族墓遺跡の高さはしばしば城壁の基礎を超えている）、参考として『左傳』僖公三十三年「文夫人歛而葬之郟城之下。」杜注「鄭文公夫人也。郟城、故郟國、在滎陽密縣東北。傳言穆公所以遂有國。」を引用する。ここは復旦出土二〇〇八に従う。

【五九】何有祖二〇〇八は「及」の意とする。陳偉二〇〇八は「仍」と讀み、「因」「從」の意とする。復旦出土二〇〇八は、ここは迎撃の類の意味であり、「應」または「膺」と讀むのではないかとし、『戰國策』齊策一「使章子將而應之」、同齊策二「夫以蘇子之賢、將而應弱燕、燕必破矣。」「詩」魯頌閟宮「戎狄是膺、荆舒是懲。」「孟子」滕文公下篇「無父無君、是周公所膺也。」趙岐注「是周公所欲伐擊也。」を引用する。孟蓬生二〇〇九Aは、基本的に復旦出土二〇〇八に従いながら、『詩經』魯頌一宮の「膺」は毛傳のいうような「當」（＝應擊、むかえうつ）ではなく、古代においては「膺擊」の意味に「應擊」は

なく「擊」(うつ)でしかない。したがってここは「膺」ではなく「應」と讀むべきだとする。孟蓬生二〇〇九Bは、音韻方面による王志平二〇〇八を引用しながらの批判に對し、反論を加えている。陳偉二〇〇九は『詩』大雅常武「鋪敦淮漬、仍執醜虜。」毛傳「仍、就。」孔穎達疏「釋詁云、「仍、因也。」因是就之義也。」などを引用して、「仍」と讀み、「因」の意とする。楊澤生二〇〇九は「邈」が日母蒸部、「迎」が疑母陽部に屬し、聲母よりいえばそれぞれ舌上音・喉音で音が離れているが、方言によっては日母・疑母は混じり合うなどとし、「迎」と讀む。ここは文脈から「應」と讀んでおく。

【六〇】復旦出土二〇〇八は乙本に從い、「乃」と讀み、この一文を楚の大夫の會話文としない。陳偉二〇〇九はこれに從う。

【六一】陳佩芬二〇〇八・葛亮二〇〇九はこれを邲の戦いとする。しかし本篇の内容からだけでは、どうともいえないようがない。

【六二】『鄭子家喪』甲本・乙本の關係について。陳佩芬二〇〇八は明らかに書體が異なり、同一人の筆寫ではないとする。李松儒二〇〇九は兩者の文字を比較し、その影響關係を推定した上で、甲本は乙本をもとにして書かれており、乙本は別の底本をもとに筆寫されているとする。羅運環二〇〇九は上海博楚簡の字體の分類を行い、甲本を「上博鄭子家喪甲體」と呼び、乙本を『君人者何必安哉』甲・乙本・『慎子曰恭儉』と共に「上博君人者體」と呼んでそれぞれを小グループとし、更に兩小グループを七つの大グループの一つ「上博東大王體」に屬する字體とする。漢尺で、甲本はおよそ一尺四寸、乙本はおよそ二尺である。一般に簡長の長い方が、書籍の格が上になることからいっても、乙本の方が甲本よりオリジナル性が高いというのには理解できる。甲本には書き損じとしか思えない文字が含まれていることから、このことが肯定されよう。

むすびにかえて——『鄭子家喪』の史料性格について——

鄭の子家(公子歸生)に關する説話は、傳世文獻では『左傳』・『史記』にみられるが、『史記』では楚の莊王の出

兵理由が鄭・晉の同盟にあるのに對し、『鄭子家喪』では子家が正式な埋葬を受けるところにある。また『左傳』では子家に關する説話の中心が、子家による鄭の靈公殺害とその後の鄭の國內政治にあるが、『鄭子家喪』では子家の存在が語られる事件の原因ではあるものの、記述の重點は楚の莊王の會話とその後の出兵などの行動に置かれており、楚の莊王が諸侯の覇者としていかにふさわしいかを示す内容となっている。傳世文獻の傳える説話とは、話の重心が異なるわけである。

また、「上帝鬼神」の怒り・「鬼神」の不祥を恐れる表現があることから、圖版では墨家系思想の影響を受けている可能性がいわれている。そこで『墨子』で本篇の内容と關係しそうなところをみてみよう。『墨子』明鬼下篇では鬼神が賢を賞し、暴人を罰することについて多くの議論がある。

『墨子』明鬼下篇

子墨子曰、逮至昔三代聖王既沒、天下失義、諸侯力正。是以存夫爲人君臣上下者之不惠忠也、父子弟兄之不慈孝弟長貞良也、正長之不強於聽治、賤人之不強於從事也。民之爲淫暴寇亂盜賊、以兵刃毒藥水火、退無罪人乎道路率徑、奪人車馬衣裘以自利者竝由此作、是以天下亂。此其故何以然也。則皆以疑惑鬼神之有與無之別、不明乎鬼神之能賞賢而罰暴也。今若使天下之人偕信鬼神之能賞賢而罰暴也、則夫天下豈亂哉。今執無鬼者曰、鬼神者固無有。且暮以爲教誨乎天下、疑天下之衆、使天下之衆皆疑惑乎鬼神有無之別。是以天下亂。是故子墨子曰、今天下之王公大人土君子、實將欲求興天下之利、除天下之害、故當鬼神之有與無之別、將不可以不明察此者也。子墨子言いて曰く、「昔三代の聖王既に没するに至るに逮び、天下義を失い、諸侯力正す。是を以て夫の人の君

臣上下爲る者の惠忠ならず、父子弟兄の慈孝弟長貞良ならず、正長の治を聽くに強めず、賤人の事に従うに強めざる存り。民の淫暴寇亂盜賊を爲し、兵刃毒藥水火を以て、罪無き人を道路率徑に退（止）め、人の車馬衣裳を奪い以て自ら利する者竝びに此れ由り作る、是を以て天下亂る。此れ其の故は何を以て然るや。則ち皆鬼神の有ると無きとの別に疑惑し、鬼神の能く賢を賞して暴を罰するに明らかならざるを以てなり。今、若し天下の人をして皆に鬼神の能く賢を賞して暴を罰するを信ぜしめれば、則ち夫れ天下豈に亂れんや。今無鬼を執る者曰く、「鬼神は固より有る無し。」と。日暮に以て天下を教誨し、天下の衆を疑わしむるを爲し、天下の衆をして皆鬼神有無の別を疑惑せしむ。是を以て天下亂る。是の故に子墨子曰く、今、天下の王公大人士君子、實に天下の利を興し、天下の害を除かんことを求めんと將欲さば、故（則）ち鬼神の有ると無きとの別の當（如）きは、將に以て此れを明察せざるべからざる者なり。」と。

同

是故子墨子曰、嘗若鬼神の能賞賢如罰暴也、蓋本施之國家、施之萬民、實所以治國家利萬民之道也。是以吏治官府之不絜廉、男女之爲無別者、鬼神見之。民之爲淫暴寇亂盜賊、以兵刃毒藥水火、退無罪人乎道路、奪人車馬衣裳以自利者、有鬼神見之。是以吏治官府、不敢不絜廉、見善不敢不賞、見暴不敢不罪。民之爲淫暴寇亂盜賊、以兵刃毒藥水火、退無罪人乎道路、奪人車馬衣裳以自利者、由此止。是以天下治。故鬼神の明不可爲幽閒廣澤山林深谷、鬼神の明必知之。鬼神の罰不可爲富貴衆強勇力強武堅甲利兵、鬼神の罰必勝之。若以爲不然、昔者夏王桀貴爲天子、富有天下、上詬天侮鬼、下殃傲天下之萬民、祥上帝、伐兀上帝行。故於此乎、天乃使湯至明罰焉。湯以車九兩、鳥陳鴈行。湯乘大贊、犯遂夏衆、入之郊遂。王手禽推哆大戲。故昔夏王桀貴爲天子、富有天下、有勇

力之人推哆大戲、生列兕虎、指畫殺人。人民之衆兆億、侯盈厥澤陵。然不能以此圍鬼神之誅。此吾所謂鬼神之罰不可爲富貴衆強勇力強武堅甲利兵者此也。……

是の故に子墨子曰く、「鬼神の能く賢を賞し如暴を罰するが嘗若きは、蓋し本之を國家に施し、之を萬民に施し、實に國家を治め萬民を利する所以の道なり。」と。是を以て吏の官府を治むるの絜廉ならず、男女の別無しと爲す者、鬼神之を見る。民の淫暴寇亂盜賊を爲し、兵刃毒藥水火を以て、罪無き人を道路に退（止）め、人の車馬衣裘を奪い以て自ら利する者は、鬼神の之を見る有り。是を以て吏の官府を治むるに、敢えて絜廉ならずんばあらず、善を見るに敢えて賞せずんばあらず、暴を見るに敢えて罪せずんばあらず。民の淫暴寇亂盜賊を爲し、兵刃毒藥水火を爲て、罪無き人を道路に退（止）め、人の車馬衣裘を奪い以て自ら利する者は、此れに由りて止む。是を以て天下治まる。故に鬼神の明は幽閒廣澤山林深谷を爲すべからず、鬼神の明は必ず之を知る。鬼神の罰は富貴衆強・勇力強武・堅甲利兵を爲すべからず、鬼神の罰は必ず之に勝つ。若し以て然らずと爲さんか、昔者夏王桀、貴きは天子爲り、富は天下を有ち、上は天を詬り鬼を侮り、下は天下の萬民殃傲し、上帝を祥り、上帝の行を伐兀す。故に此に於いてか、天乃ち湯をして明罰を至さしむ。湯は車九兩を以い、鳥陳鷹行す。湯は大贊に乗り、夏の衆を犯遂し、之が郊遂に入る。王、推哆・大戲を手禽す。故に昔夏王桀、貴きは天子爲り、富は天下を有ち、勇力の人、推哆・大戲有り、兕虎を生列（裂）し、指畫して人を殺す。人民の衆きこと兆億、侯れ厥の澤陵に盈つ。然れども此れを以て鬼神の誅を圍ぐこと能わす。此れ吾が所謂鬼神の罰は富貴衆強・勇力強武・堅甲利兵者を爲すべからずとは此れなり。……

右に引用した『墨子』明鬼下篇では、鬼神は賢や善を賞して暴を罰するとされ、いかなる富貴や勇武といえども鬼神の罰の前では役に立たないことが論じられている。『鄭子家喪』では、鬼神の怒りは子家が主君を殺したのに然るべき儀禮をもつて埋葬されようとしていることに對して下されると認識されている。確かに子家は主君を殺したのであるから「暴」をなしたことになるが、『鄭子家喪』ではそのことが直接問題になつてゐるわけではなく、子家が正式な埋葬を受けることの是非が議論されている。子家が生前、鬼神の罰を示すような禍に見舞われることなく没したという史實は變更できないということではあろうし、『墨子』明鬼下篇には死者に對する祭祀の重要性を述べる部分があるけれども、やはり『墨子』明鬼下篇の論點とは少しずれている。それから、この種の因果應報的な鬼神觀は何も『墨子』に限らない。例えば『左傳』昭公二十年には、齊の景公が疥の病にかかつて治癒しないことを理由に祝史を処刑しようとしたことに對する晏子の會話文で、

對曰、若有德之君、外内不廢、上下無怨、動無違事、其祝史薦信、無愧心矣。是以鬼神用饗、國受其福、祝史與焉。其所以蕃祉老壽者、爲信君使也、其言忠信於鬼神。其適遇淫君、外内頗邪、上下怨疾、動作辟違、從欲厭私、高臺深池、撞鐘舞女、斬刈民力、輪掠其聚、以成其違、不恤後人、暴虐淫從、肆行非度、無所還忌、不思謗讟、不憚鬼神、神怒民痛、無悛於心。其祝史薦信、是言罪也。其蓋失數美、是矯誣也。進退無辭、則虛以求媚。是以鬼神不饗、其國以禍之、祝史與焉。所以天昏孤疾者、爲暴君使也、其言僭嫚於鬼神。

對えて曰く、「有徳の君の若きは、外内廢せず、上下怨み無く、動きて事に違ふ無く、其の祝史信を薦めて、鬼神無し。是を以て鬼神用て饗し、國は其の福を受け、祝史與る。其の蕃祉老壽なる所以の者は、信君の爲めに使われ、其の言、鬼神に忠信なればなり。其の適たま淫君に遇えば、外内頗邪、上下怨疾し、動作辟違し、欲を從

にして私に厭き、臺を高くし池を深くして、鐘を撞き女を舞わし、民力を斬刈し、其の聚を輪掠して、以て其の違うを成し、後人を恤えず、暴虐淫從にして、肆に非度を行い、還忌する所無く、謗讒を思わず、鬼神を憚らず、神怒り民痛むも、心に憐むる無し。其の祝史、信を薦めれば、是れ罪を言うなり。其れ失を蓋い美を數えれば、是れ矯り誣うるなり。進退に辭無ければ、則ち虚にして以て媚を求む。是を以て鬼神饗けず、其の國以て之に禍せられ、祝史與る。天昏孤疾する所以の者は、暴君の爲めに使われ、其の言、鬼神に僭慢なればなり。」とある。祝史という祭祀集團が介在しているが、鬼神と國の禍福との關係は『墨子』明鬼下篇に類似する。したがって本篇の鬼神觀を『墨子』のみと特に關連づけることに意味があるとは考えられない。

また「鬼神」との關連から、本篇は上海博楚簡『鬼神之明』も想起させる。『鬼神之明』については、最初の釋文である曹錦炎二〇〇五が既に『墨子』の佚文であることを指摘している。丁四新二〇〇七はこれを否定する。西山尚志二〇〇七・西山尚志二〇〇九注【4】は傳世文獻との綿密な對照により、『鬼神之明』の一節「貴爲天子、富有天下」が、『墨子』天志上篇・天志下篇にみられる議論に似ており、それが漢代以降失われた單純素材的なロジックであることをいう。また、李承律「上博楚簡『鬼神之明』の鬼神論と墨家の世界觀研究」（『出土文獻と漢字文化研究會』第一一〇九次定例研究會報告、東京大學、東京、二〇〇九年四月二五日）は、鬼神の明知と賞罰能力について懷疑的な立場がとられ、「鬼神不明」という新しい學説が提起されていることを述べているが、『鄭子家喪』にはそのような懷疑主義はみられない。楚の莊王が、鄭を攻撃する口實の一つとして（上帝）鬼神の怒りをもちだしているだけである。したがって『鄭子家喪』は墨家の文獻とまでは斷定できないだろう。ただ本篇はそういう墨家思想の基盤となる鬼神に關する思想の影響を受けており、戰國時代の楚地域にはそういう文獻がいくらか存在したということまではいえ

る。

そして『鄭子家喪』は楚の莊王を稱揚するような内容であるから、出土地と推測される楚地域にとって都合がよい。ただ『鄭子家喪』が楚地域で成書されたのか、他地域で成立した文獻の中、都合のよい説話が楚地域で抜き出されて副葬されたのかは分からない。いずれにせよ傳世文獻を含め、この種の説話における説明的な部分（小倉芳彦一九六三が『左傳』の内容を三分類した中のⅡに近い）を、大した批判的検討もせずに史實として信用するのは危険であることを示している。それから、歴史的な題材をもとにしたこの種の説話が戰國中期の各地に存在し、そういった説話が『左傳』・『國語』・『史記』にみられる説話の材料になったということも想定できよう。

關係論著と略記一覽

『鄭子家喪』專論

圖版・『鄭子家喪』圖版（馬承源主編『上海博物館藏戰國楚竹書』（七）、上海古籍出版社、上海、二〇〇八年十二月）

陳佩芬二〇〇八・陳佩芬『鄭子家喪』譯注（馬承源主編『上海博物館藏戰國楚竹書』（七）、上海古籍出版社、上海、二〇〇八年十二月）

何有祖二〇〇八・何有祖「上博七『鄭子家喪』筭記」（簡帛網、二〇〇八年十二月三一日）

陳偉二〇〇八・陳偉『鄭子家喪』初讀（簡帛網、二〇〇八年十二月三一日）

凡國棟二〇〇八A·凡國棟「上博七『鄭子家喪』校讀節記兩則」(簡帛網、二〇〇八年十二月三一日)

凡國棟二〇〇八B·凡國棟「釋『鄭子家喪』的「滅覆」」(簡帛網、二〇〇八年十二月三一日)

羅小華二〇〇八·羅小華「『鄭子家喪』·『君人者何必安哉』選釋三則」(簡帛網、二〇〇八年十二月三一日)

復旦出土二〇〇八·復旦大學出土文獻與古文字研究中心研究生讀書會「『上博七』『鄭子家喪』校讀」(復旦大學出

土文獻與古文字研究中心、二〇〇八年十二月三一日)

程燕二〇〇八·程燕「上博七讀後記」(復旦大學出土文獻與古文字研究中心、二〇〇八年十二月三一日)

郝士宏二〇〇九·郝士宏「讀『鄭子家喪』小記」(復旦大學出土文獻與古文字研究中心、二〇〇九年一月三日)

張新俊二〇〇九·張新俊「『鄭子家喪』「慝」字試解」(復旦大學出土文獻與古文字研究中心、二〇〇九年一月三日)

一蟲二〇〇九·一蟲「由『鄭子家喪』看『左傳』的一處注文」(復旦大學出土文獻與古文字研究中心、二〇〇九年

一月三日)

葛亮二〇〇九·葛亮「上博七『鄭子家喪』補說」(復旦大學出土文獻與古文字研究中心、二〇〇九年一月五日)

侯乃峰二〇〇九A·侯乃峰「『上博(七)』『鄭子家喪』「天後(厚)楚邦」小考」(復旦大學出土文獻與古文字研究

中心、二〇〇八年一月六日)

孟蓬生二〇〇九A·孟蓬生「『邊』讀爲「應」補證」(復旦大學出土文獻與古文字研究中心、二〇〇九年一月六日)

熊立章二〇〇九·熊立章「續釋「春」及『上博七』中的幾個字」(簡帛網、二〇〇九年一月九日)

陳偉二〇〇九·陳偉「『鄭子家喪』通釋」(簡帛網、二〇〇九年一月一〇日)

孟蓬生二〇〇九B·孟蓬生「『邊』讀爲「應」續證」(復旦大學出土文獻與古文字研究中心、二〇〇九年一月一〇

H)

李天虹二〇〇九・李天虹『鄭子家喪』補釋」(簡帛網、二〇〇九年一月二日)

……釋文は基本的に陳偉二〇〇九による。

高祐仁二〇〇九・高祐仁「釋『鄭子家喪』的「滅嚴」」(復旦大學出土文獻與古文字研究中心、二〇〇九年一月四日)

H)

楊澤生二〇〇九・楊澤生『上博七』補說」(復旦大學出土文獻與古文字研究中心、二〇〇九年一月四日)

侯乃峰二〇〇九B・侯乃峰「上博(七)字詞雜記六則」(復旦大學出土文獻與古文字研究中心、二〇〇九年一月

一六日)

劉信芳二〇〇九・劉信芳『上博藏(七)』試說(之三)」(復旦大學出土文獻與古文字研究中心、二〇〇九年一月

一八日)

單育辰二〇〇九・單育辰「佔畢隨錄之九」(簡帛網、二〇〇九年一月一九日)

劉雲二〇〇九・劉雲「上博七詞義五札」(簡帛網、二〇〇九年三月一七日)

李松儒二〇〇九・李松儒『鄭子家喪』甲乙本字跡研究」(簡帛網、二〇〇九年六月二日)

宋華強二〇〇九A・宋華強『鄭子家喪』「以及於今而後」小議」(簡帛網、二〇〇九年六月九日)

宋華強二〇〇九B・宋華強『鄭子家喪』「滅光」試解」(簡帛網、二〇〇九年六月二日)

巫雪如二〇〇九・巫雪如「楚簡考釋中的相關語法問題試探」(簡帛網、二〇〇九年六月一八日)

金城竹村二〇〇九・金城未來・竹村涉『上海博物館藏戰國楚竹書(七)』所收文獻概要(一)」(『中國研究集刊』

四八、豐中、二〇〇九年六月)

宋華強二〇〇九C・宋華強「『鄭子家喪』『平王問鄭壽』_レ就_レ字試解」(簡帛網、二〇〇九年七月二二日)

羅運環二〇〇九・楚簡帛字體分類研究(三)(簡帛網、二〇〇九年七月二八日)

その他關係論著

小倉芳彦一九六三・小倉芳彦「ぼくの左傳研究とアジア・フォード問題」(『歴史評論』一九六三―五、東京、一九六三年五月)

沈培二〇〇三・沈培「上博簡『緇衣』篇「恣」字解」(『華學』第六輯、紫禁城出版社、北京、二〇〇三年六月)

何琳儀二〇〇四・何琳儀「新蔡楚簡選釋」(『安徽大學學報』(哲學社會科學版)二八一―三、合肥、二〇〇四年五月)

陳劍二〇〇四・陳劍「說花園莊東地甲骨卜辭的「丁」——附「釋速」——」(『故宮博物院院刊』二〇〇四―四、北京、二〇〇四年七月)

陳斯鵬二〇〇五・陳斯鵬「『東大王泊旱』編聯補議」(簡帛研究網、二〇〇五年三月一〇日)

沈培二〇〇五・沈培「周原甲骨文裏的「凶」和楚墓竹簡裏的「凶」或「思」」(河北大學漢字研究中心編『漢字研究』第一輯、學苑出版社、二〇〇五年六月)

曹錦炎二〇〇五・曹錦炎「鬼神之明 融師有成氏」(馬承源主編『上海博物館藏戰國楚竹書』(五)、上海古籍出版社、上海、二〇〇五年十二月)

陳劍二〇〇六・陳劍「談談『上博』(五)的竹簡分篇・合與編聯問題」(簡帛網、二〇〇六年二月一九日)

西山尚志二〇〇七・西山尚志「上博楚簡『鬼神之明』的「貴爲天子、富有天下」」（簡帛研究網、二〇〇七年五月一四日）

丁四新二〇〇七・丁四新「上博楚簡『鬼神』篇注釋」（『楚地簡帛思想研究』三、湖北教育出版社、武漢、二〇〇七年六月）

凡國棟二〇〇七・凡國棟「『上博六』楚平王逸篇初讀」（簡帛網、二〇〇七年七月九日）

王志平二〇〇八・王志平「『罷』字的讀音及其相關問題」（『古文字研究』二七、中華書局、北京、二〇〇八年九月）
西山尚志二〇〇九・西山尚志「上海博楚簡『鬼神之明』譯注」（出土資料と漢字文化研究会編『出土文獻と秦楚文化』第四號、日本女子大學文學部谷中信一研究室、東京、二〇〇九年三月）

簡帛研究関連サイトのアドレス

簡帛網……<http://www.bsm.org.cn/>

簡帛研究網……<http://www.jianbo.org/>

復旦大學出土文獻與古文字研究中心……<http://www.gwz.fudan.edu.cn/>

※ 本稿は第四二回上海博楚簡研究会（於東京大學法文一號館、二〇〇九年七月二五日）における報告を加筆修正したものである。文中、研究会での議論を反映させたところが少なからずあるが、繁雑さを避けるため、重要と考えたものを除き一々注記することはしなかった。出土文獻の譯注は、通常こういう性質をもつものとお考えい

ただきたい。

なお本稿は平成二十一年度科学研究費補助金（若手研究（B））「周代宗法制」の成立に関する研究」による研究成果である。

上博楚简《郑子家丧》译注

——附：史料特征小考——

小 寺 敦

本文是对战国时代楚地出土文献——上博楚简《郑子家丧》所作的译注，同时对其史料特征展开初步的考察。《郑子家丧》内容大致如下所示：郑子家死后，围绕其葬仪引发了历史事件，春秋五霸之一、有名的楚庄王向郑国发动攻击，为此晋国出兵救援，楚国也出兵，最终战胜了晋国。与本篇相关的记事也见于《左传》、《史记》，因为有言及鬼神之处，所以和《墨子》的关系也被学者讨论。然而，分析本篇所见和鬼神相关的内容，其结果是，我不认为其鬼神观只能仅仅和《墨子》联系起来。此外，《郑子家丧》中因为有称扬楚庄王的内容，因此将其出土地推测为楚地，看上去是不错的。但不知道《郑子家丧》究竟是楚地形成的、还是从其他地区已形成的文献中，抽出对自己有用的部分，随葬到了楚墓之中。虽然《郑子家丧》记载了和《左传》《史记》相同的时间、地域、人物，但关于楚国攻击郑国的理由说明却大为不同。因此，包括传世文献在内，对这类故事中的说明部分，不做严格的文献批判，直接当作史实相信是很危险的事。我认为，以历史题材为前身的这类故事在战国中期各地都存在着，这些故事后来成为《左传》、《国语》、《史记》所见故事所使用的材料。